

ヘミングウェイの世界

佐藤英夫

ヘミングウェイの世界は狭く限られている様であるが、強い迫力に満ちたものである。そしてその迫力の多くが、死の近接感や存在から生まれている。6つの長篇の中、4つまでが主人公自身、あるいは副主人公的人物の死を含んでいる。例えば、‘A Farewell to Arms’のCatherine Barkleyは恋人たちの幸福が確保されたかに見えた所で “What do you advise?” “There are two things. Either a high forceps delivery which can tear and be quite dangerous besides being possibly bad for the child, and a Caesarean.”¹⁾ の如く手術を迫られ “What’s the matter with the baby?” …… “He wasn’t alive.” …… He was such a fine big boy. I thought you knew.²⁾ あるいは It seems she had one hemorrhage after another. They couldn’t stop it. I went into the room and stayed with Catherine until she died. She was unconscious all the time, and it did not take her very long to die.³⁾ の如く産褥の床に死し、‘To Have and Have Not’のHarry Morganは …… and had been shot three times through the left shoulder, two shots going into the gas tank, sat up, took careful aim, and shot him in the belly.⁴⁾ 既ちハッチを閉めようとして周囲を見渡した時に射たれ, “A man,” Harry Morgan said, looking at them both. “One man alone ain’t got. No man alone now.” He stopped. “No matter how a man alone ain’t got no bloody fucking chance.” He shut his eyes. It had taken him a long time to get it out and it

had taken him all of his life to learn it.⁵⁾ の様に洋上の乱闘に倒れ、又、'For Whom the Bell Tolls' の Robert Jordan は自らの手で爆破した橋の傍で死を待ち続けている。この様に従来のヘミングウェイの主人公は外部からの攻撃で、いわば暴力的な死と対立しなければならない場合が典型的であったのに対し、'Across the River and into the Trees' の主人公 Coronel Richard Cantwell は最後の数章の鴨猟の場面で切迫している死を予想して "Put that in your pocket, Jackson, and act on it necessary. If the circumstances described occur, it is an order."⁶⁾ と色々な後仕末をする。The Coronel started to speak but he stopped while it hit him the third time and gripped him so he knew he could not live. …… "Good. I'm now going to get into the large back seat of this good-damned, over-sized luxurious automobile." That was the last thing the Coronel ever said.⁷⁾ の如く、彼の死亡の際の処置をしるした命令書（紙片）を書いて間もなく、むしろ内面的な病魔との戦いに立ち向い、帰途の自動車の中で三度目の心臓発作の為に急死してしまう。

彼は処女作に 'In Our Time' と名付けている。その主題と関心が現代にかかわっているという意味には違いないが、批評家フィリップヤングはこの処女作品が彼の全作品の中で占めている地位がどんなものであるかについての一説を出している。先づこの題をつけた彼の心の中には、The book came out in 1925, and is called In Our Time. Very probably the author intended his title as a sardonic allusion to a phrase from the Church of England's Book of Common Prayer: "Give peace in our time, O Lord."⁸⁾ という言葉が浮んでいたもので、「与え給え」と神に祈る事は、平和が現存しないからであり短篇集自身の内容に照らし合わせて見る時、これは底意地の悪い引用と解される。

何故なら、ヘミングウェイは題名については極めて意識的で、場合によ

ってはあらわなまでに反語的な態度を示す作家である。この In Our Time の中にも、否応なしに見せられるものは、平和の「反対物」であり、平和のない悪と暴力の世界を描き出していると解せられる。この15章からなる短篇は、その中8篇にニックアダムスと言う人物が登場し、それを結び合わせる事によって1人の人間の精神が「悪と暴力」の世界の中で形成されていく過程を見つめる事によって、ヘミングウェイ文学の本質につながる事を論証しようとするのが、P. Young のこの作の解釈の眼目となっている。この短篇集の巻頭の物語は、'Indian Camp' と名付けられ、医者である父親につれられてニック少年が湖の向う岸にあるインディアン部落を訪れる話しである。父親の用件は往診であり、患者は難産の婦人である。父親がニック少年を伴った主たる目的は、彼の言葉にも伺はれる様に明らかに「教育的」なものである。'This lady is going to have a baby, Nick,' 'I know,'⁹⁾ と答える少年に 'You don't know,' said his father. 'Listen to me. What she is going through is called being in labour. The baby wants to be born and she wants it to be born. All her muscles are trying to get the baby born. That is what is happening when she screams.'¹⁰⁾ と父親の冷静な説明が加えられる。ニック少年にとって、この誕生という事実の実物教訓であって、陣痛の苦しさにインディアンの婦人のあげる悲鳴も耳に入り、やがて帝王切開手術を急場のありあわせの道具を使って行った時も、父親はニック少年に助手を命ずるのである。少年は父親の手先を見ない様に目をそらせているが、手術は長時間を要したのである。がその後思いもよらぬ事件が起きてしまう。妻の手術中も、足の怪我で上段のベッドに横たわっていた夫がのどを切って自殺した事に気付くのである。医者は 'Take Nick out of the shanty, George,'¹¹⁾ と叔父に頼むのであるが、少年の目に、はっきりと耳から耳まで切られた死体と、ベッドのくぼみにたまった血が映っていた。

帰途の小舟の中で、父親と少年の間で、自殺や死の苦しさについて問答が交される。少年が舟端から水中に手を入れると、It felt warm in the sharp chill of the morning.¹²⁾ そして…… he felt quite sure that he would never die.¹³⁾ と生きる楽しさを感じ受する。既ちこの ‘Indian Camp’ は educational な父親の意図をすべて出し抜いて、少年にとっては死についての initiation となる。しかも、誕生との鮮やかな対照に於いての死の確認であり、生の開始と終末とを同時に、彼の感受性は否応なしに押しつけられてしまったのである。勿論少年にとって、はるかに印象的なものは、人間の誕生と死について、又その持つ暴力について、始めて知らされた事にある。少年は湖水のほの暖かさに、やっと生の自信を取り戻すと言ってもよく、その際彼が自分の死についてさえも思っていたさざるを得なかった次第を、作者は控え目に書いているだけに一層明瞭に伝えられている。主人公ニックアダムスが ‘In Our Time’ に於ける第一歩は、死について確認する事から始まり、最終的にどこに到達するかは、最後の短篇 ‘Big Two-Hearted River’ に目を移して見ると、ここでは一見何の格別な事も起らない。しかし、ニックの鱒釣旅行の淡々たる記録で一貫し、汽車から降り立つ場面から物語が展開され、終日河釣の後、まだ幾日も先がある事に期待を寄せながらテントに戻って来る姿で終末を告げている。所謂 Hemingway’s style はこの様な無飾さに於いて一つの極点に達し、外的動作のみがその時間的順序に従って、機械的な正確さで書き止められている。例えば、…he took the axe out of the pack and chopped out two projecting roots. That levelled a piece of ground large enough to sleep on. He smoothed out the sandy soil with his hand and pulled all the sweet fern bushes by their roots. His hands smelled good from the sweet fern. He smoothed the uprooted earth. He did not want anything making lumps under the blankets. When he had the ground smooth, he spread his three blankets. One

he folded double, next to the ground. The other two he spread
on top.¹⁴⁾ の様にテントの張り方、食事の準備、釣の経過が既物的な的確
さで記録されている。目指されているのは、魚釣の体験の特にそのフィジ
カルな実体の正確な表現に過ぎない様に写る。魚釣の持たらず純粹に肉体的
な快感こそ、作者の伝え様と望んだものと信じたくなる。実際に鱒が餌
に食いつくや否や、釣竿は生気を帯び主人公の股までしみ通って来る水流
の冷さの中で、彼の鼓動が一瞬停止する興奮が鮮やかに描かれている。し
かし一見何のかげもない健康そのもののこの物語に一種の不気味さがあ
る。例えば Nick's hand was shaky, he reeled in. The thrill had
been too much. He felt, vaguely, a little sick, as though it would
be better to sit down.¹⁵⁾ や Nick was hungry. He did not believe he
had ever been hungrier. He opened and emptied a can of pork
and beans and a can of spaghetti into the frying-pan.¹⁶⁾ の様に釣
り上げる際の瞬間の興奮や朝食の熱いスパゲッティのうまさをくっきりと
浮び上らせているのは、実は全篇を取り囲んでいるその色濃いくまどりに
他ならない。外的な動作の細部を記録する機械的な正確さも、その執拗な
くり返しによって、呪文の呟きに似た味わいを帯び始める。主人公が魚釣
や食事や幕営の細部に、この様に念入りに専念するのは、何物か一から逃
れ様として、或いは内なる何物かを押し殺そうとしている為であろう。こ
こに登場する Nick はもはや巻頭の様な少年ではない。これまでの間
には、既に多くの事が起っている。その多くの事に関する直接の言及は見受
けられないが、It was a long time since Nick had looked into a
stream and seen trout.¹⁷⁾ の様に「昔の気持」と言った文句が幾度も表わ
れて来て注意を引く。ニックが冒頭で降り立つ風景は異様なまでに印象
的である。町に家並があると思いついていた場所は一面の焼野原である。
すっかり焼け果てた跡であって、家の土台石まで火の熱気でヒビ割れてい
る。'...burnt timber' や 'the burnt-over country' とか 'burnt off' と

いう言葉がくり返して使われる。彼があとで、途中で見かける「バッタ」までも焼跡に居る為の煤で真黒になっている。ここには過去の懐しい風景の外形的な変化と言う以上のものが含意されている。黒々と一面焼け果てた事は、昔の風景えの回顧であると同時に、主人公の秘めた内なるものの何かであろう。少くともその効果に於いて冒頭の焼野原は、全体えの、いわば額縁をなし、内的な風景としてくまどっている。そしてこの意外な焼跡から受けた心の衝撃をいやそうとする様に、主人公の眼は、澄みきって底まで見える河流であり、特にその深く早い流れの中で、じっと体を保っている鱒の姿である。ニックは長い間鱒に見入っていたと書かれており、特に‘…… keeping themselves steady …… (1回)’とか‘…… holding themselves…… (3回)’と言う語が153語の短い描写の中4度も使われているのである。早い流れに対して平衡を保つことに努めるこの鱒の姿は、何もののにも擾さないバランスを求めて止まない主人公の精神を鮮やかに浮ばせる。じっと体を保っている鱒の姿は、この部分のみならず、作中あるいは一度釣り上げた鱒を唯小さすぎる理由から、注意深く傷つけない様に水中に離された一匹、又釣針から逃げていった「大鱒」についてもくり返しの描写が、一層その象徴性を増している。のみならず、この描写の直後には、重荷に喘ぎながら坂道を登っていく主人公の姿が描かれ、しかも日光の強さや筋肉の痛みの中に、むしろ幸福を感じている彼が見出せる。……Nick felt happy. He felt he had left everything behind, the need for thinking, the need to write, other needs. ¹⁸⁾…… この様にして鱒に眺め入る主人公の心は、明らかにすべてのものから逃れたい彼の心理的欲望によって裏付けられる。そしてこの短篇に於ける一見単純で既物的な描写は、主人公の心理的欲望と結びついて、急に生きた内的風景と化している。例えば、順序正しく唯一の手落ちもない様にテントを張った主人公は、既にそこには神秘的な家庭めいた何ものかが生じた事を感じ、テントの中に入って幸福感を覚える。為すべき事を為し終えて、身を休

める場所をを作り、テントの内側のみが明るく、外界の暗さをはっきりと感じとって、自らの手でわずかの明るい休み場を確保し得た喜びにひたる。不吉なものから、辛うじて、うちなる平衡を守ろうとする願望が強く働いている。これは明らかに防禦の意志に結びつくものである。彼は寝ようとする、にわかに彼の精神が動揺し始めるが、疲労度が高かった為にこの気持ちを押し殺せる自信から、衣服を脱ぎ始めた。不眠えの恐怖があり、働き始める自らの精神への恐怖がある。彼はこうした自らの精神からさえも、自己を防禦せねばならない様な人物である。彼の周囲には、確かに暗い影と不安がまといつき、彼の努力の一切は、この影の中で何かを救い出すことにある。彼を覆う不吉な影は、そうした影の中で、物語の終末近くの沼の深みの中の描写に於いて一段と濃く染めている。主人公は、深みに踏みこむ事に極度の恐れを示し、腋の下まで入りこむ水の冷さを好まないばかりではない。むき出しの岸辺や、日光も通さない大きな杉の木影も恐れているのである。深みでの魚釣りは悲劇的な冒険である事を恐れているのである。大げさな言葉を極端に嫌うヘミングウェイがここで用いる *tragic* という語が特に注意を引いている。又深みでは、かかって来た鱒を引き上げる事も出来ないのも悲劇的な理由の一つである。主人公の平衡と幸福は、急流に身を保っている鱒の如くに、細心な用意の上に支えられているものであって、悲劇的という言葉の響きの強さは、彼の平衡と幸福の貴重さ、或いは得難さにつり合っている。つまりそれは、彼の上に同時におおいかぶさる影の深さを暗示するものである。では、彼が念入りに組立てたテントを取り囲む外界の闇や、彼の鱒釣りにつきまとう注意深く避けるべき深みとは何を意味しているのかについて少しく探求して見ると、この物語は勿論厳密なアレゴリーではない。不吉な影が伝えられればそれで足る事であろうし、その実体や原因を明確に指示することが、必ずしも必要なものではない。しかしここで冒頭で描かれたその礎石までが割れくずれた、一つの町の死の姿が思い出されて来る。更に彼が、一度釣り上げ

た鱒を離してやる際の、体の柔かい粘液に傷つけない為の細心の注意と、無事に離し終った後の安堵感、そしてその際にも蘇って来るものが、かつて彼の見た不注意な釣人の手で無意味に殺された白いこけの生えた鱒の死骸の群である事を思い合わせずにはいられないのである。更にこの物語には、一部、二部に付されたエピグラフの短章がある。一部の短章では、牛に突き刺されて、血と砂にまみれて死んでいく闘牛士の最後が描かれ、二部の短章では、死刑囚の最後が描かれている。死の恐怖の為に、足腰が立たず、遂には括約筋力を失ったままで処刑されていく。両れの章とも、この物語と直接の結びつきはないが、それだけに一層あらわな死の描写は注目される。‘In Our Time’の終章に行きついたニックにとって、かつての死の影は消え去らない。むしろ一段と隠微な形で、彼の奥深くまで深さを増している。ここでニックにつきまとう死の所以を明らかにする為にも、この短篇集に特異な形を与えているエピグラフについて考えて見たい。ヘミングウェイが最初 ‘In Our Time’ の名で発表したのは、いわゆる小文字版による “in our time” であり、32頁の小著であった。これは18のスケッチ風な短篇を集めたものであったが、翌1925年に出版されたアメリカ版に於いて、多少の変化が加えられたが、今度16にはわたる章分けにされたエピグラフとして殆んどそのまま生かされている。従って完成型に於ける ‘In Our Time’ はその構成上、先に述べた以上に複雑さを内含するものとなったのである。これらの短章の、いわば固執的な保存も勿論自己の処理作的な作物への愛着と言った偶然的なものとは割り切れないものがある。せいぜい第6章の ‘A Very Short Story’ と第7章の ‘Soldier’s Home’ を除いては全く見当らない。しかし今これらのエピグラフのすべてについて見ると、戦場の兵士に関するもの6篇、闘牛に関するもの6篇、ギリシャの革命関係が3篇、それにアメリカの監獄での死刑執行を扱ったもの1篇と言うものである。

第一章は、全員が酔っぱらった軍隊の中で、戦場から50kmも離れてい

るのに、炊事の光を消さないといけないと注意する副官を描いている。軍隊の混乱した無秩序と言うばかりでなく、底にひそむ死の恐怖が暗に示されている。次々と順番にねらい打ちされて死んで行くドイツ兵がくり返して出て来る。又危うく死をまぬがれたニックの話等が特に印象的なのは、二つの凄惨な処刑の場面である。第5章の6人の大臣の銃殺では、腸チブスで弱りきって立つ事も出来ず、水溜に坐りこんだまま打ち殺される人が描きこまれている。又、第15章では、先に触れた死刑囚の話である。そこには人間の惨めな醜い死に様に対する殆んど偏執的な関心さえ感じさせられるものが描かれている。ヘミングウェイはこうした枠組こそ 'In Our Time' の避け難い生存の条件であり、一見即物的で断片的に見え兼ねない他の物語をも、はっきりとこの様な枠組の中で読み、進める事を求めている様に思う。少年期の大部分をミシガン州の奥の美しい自然を背景に持ち、幸福な釣物語にさえも、死が姿を消し難い刻印を残している事を知ったが、特に次の事柄に留意したいのである。即ちニックの少年期を扱った5篇の物語のあと、第6章は題名通りに 'very short'、つまりわずか2頁にも満たない短篇ではあるが、その主人公が「彼」のみで、最後まで個有名詞は語られていない。しかし、いかにもそれを補足するかの様に、エピグラフで始めてニックの名前が表われてくる。この時に於いて始めて、主篇とエピグラフとの内容が一到する。主篇は、戦傷兵と看護婦とのグロテスクな程惨めな結末に至る恋愛を粗いタッチで素描し、エピグラフでは、背景をやられ、暑い日差しの下で、血と汗にまみれて横たわっているニックの妻を描いていて、その間のつながりが明瞭になっている。勿論、主篇の主人公のそのまま厳密にニックと解せねばならないと言うのではないが、ここで作者は、主人公の重傷、死の接近の自身での体験に重点を置いている事だけは疑えない事実である。更に、第7章でもエピグラフは激しい砲撃の最中、死の恐怖から、夢中で神に祈るのであるが、その事だけは誰にも話さない男を扱っており、心理的には前篇のエピグラフと同質と考

えられる。しかも主篇の 'Soldier's Home' は帰還した兵士が、家族や郷里の町の生活と、自分との間に越え難い断絶を感じざるを得ない体験を描いている。その断絶の原因が、彼の戦争体験に存し、恐らくその最も大きな一つが、誰にも話さない死の体験にある事は容易に推察出来る事である。短篇の主人公がニックとは、はっきり別の名前を与えられている事は事態を一般化しただけに過ぎず、彼の個人的な体験を、いわばもっと普遍的な一つの世代共通のものとして確認させようと言う作者の意図に他ならないと考えざるを得ない。

以後第8章以下の物語でエピグラフと主篇との間に、この様に明瞭にしかも直接的なつながりは全く見当らないのは、ここに於ける照応を一層興味深いものと考えられるのである。'In Our Time' の戦争体験の中核的な重要性については、1900年を中心にして生まれたアメリカ文学に於ける戦争の世代の作家達、即ち John Dos Passos, William Faulkner, と相変んでのヘミングウェイは19才で自身志願して戦争に参加し、イタリア戦線で看護兵として働いているうちに、砲弾の破片が当って塹壕の下に埋れ、全く生死不明の状態が4日間あった。その時の弾丸の破片はヘミングウェイの体内に幾つも残っていたと言われるが、彼の体内にいくい込んで残ったものは、勿論砲弾の破片ばかりではなかった。これは真偽にかかわらない、いわば象徴的な話である。作家自身の青春にとって決定的な体験であったものが、彼の処女作の中核的な主題をなす事は極めて当然な成行きである。'In Our Time' は作者が戦争体験によって植えつけられた視力を自己を中心として、現代にふり向けた所に生まれた作品である。ニックの少年期に、死の影をふり向けた地に、さぐり出すのも、思い出を再訪した後のニックが焼け果てた山腹や、沼の深みに象徴的な不気味さを見てとらずにいられないのも、いずれも同じ視力の為す仕業である。'A Very Short Story' は戦争体験の苦しさを、恋愛の惨めな結果によって強調しようとして自虐的な焦立ちが目立つ作品である。がしかしこの短篇やその

エピグラフを母胎として長篇 ‘A Farewell to Arms’ が構想されるに至るのは自然な成行きである。この断片の中で、深傷を負ったニックが担架を持っている間に、負傷仲間の Lieutenant Rinaldi に “You and me¹⁶⁾ we’ve made a separate peace.” と話しかける所がある。死のいわば大量生産者である戦争に対する自然の反応は、まずそこから逃れたい。個人的にも単独で拒否したと言う態度に違いない。つまり武器にはもうおさらばと言う訳で、これが戦争体験を正面から直接に取り上げたあの長編の題名の意味であった。 ‘A Farewell to Arms’ はまず戦争を背景にした恋愛小説であり、 ‘A Very Short Story’ に於けると同様に負傷した兵士と病院の看護婦とが、戦争の間隙を盗んで、更には戦争から抜け出して、愛の喜びにひたろうとする。両者の愛の喜びの描写には、作者独特の牧歌的な美しさがあふれており、戦争という外的な巨大な現実から愛を救い出そうとするむしろ悲劇的な試みであるとしてこれを見れば、現代版ロメオとジュリエットであると呼ぶ事も出来るでしょう。しかし既に ‘In Our Time’ を書き終えている作者が、素朴な恋愛の讃歌、愛の悲劇を書く事が出来るものであるのか？。当初友人の紹介を期とする戦場に於いての行きずりの恋の戯れが、次第に真の愛の誕生えと鍛え育てられていくプロセスとしてこの物語を読むことが出来、必要でもあるが、それだけでは割り切れないものが存している。今これを脱走小説の一面として考えるならば、脱走は synecdoche で、この主人公に於ける殆んど唯一の積極的な行為として目に止まるものであって、 ‘A Farewell to Arms’ という題名を文字通りに受け取るならば、この小説の中核的な行動を為すべきものであると考えられる。勿論ここに於ける脱走自体が、独自の設定と結びつけるつもりはない。世界第一次大戦後にあらわれた戦争小説は、その大部分に於いて、厭戦的あるいは反戦的であって、その戦争嫌悪、戦争批判を具体化する方法の一手段として、脱走のテーマは、一つの系列を形作るものとしても一般的なものであった様に思われる。むしろ問題になるのは、脱走の

動機づけに存するものであって、ヘミングウェイの独自性が鮮やかに浮び上ものは、この一点に焦られる。ではこの主人公を脱走に駆り立てた直接の動機は何であったのであろうか。separate peace の言葉に伺はれる戦争嫌悪やスローガンや、美名えの反撓は既に彼の中には充分芽生えていたが、はっきり意識されたイデオロギーな反戦主義と言い切る事は妥当ではないであろう。まして恋愛が直接に彼を駆り立てた訳でもないであろう。彼の所属していたイタリヤ軍は敗れ、総退却と言うよりは、無秩序な敗走が始まり、このあたりの描写は、集団の動きを見事に捉え得たものとして、多くの選集に引かれているが、主人公もその一人として、雨と泥の道を自動車に乗ったり、歩いたりしながら敗走を続けるのである。ある橋の畔までたどり着くと、憲兵が取調べをしている。将校と外国人らしい連中は、ここで一切捕え、至極形式的な訊問の後、軍律違反あるいはスパイ容疑で、簡単に処刑されてしまうのである。

そこで彼等の一人は “It is you and such as you that have let the barbarians onto the sacred soil of the fatherland.”²⁰⁾ と言う。又 “Have you ever been in a retreat?”²¹⁾ と反問する将軍に向って、 “Italy should never retreat.”²²⁾ とやり返す。彼等には自ら射たれることなくして、一方的に射ち続ける人間の冷さと、敗走以前の主人公の感想を思い合わせる必要から次の文を引用したいのである。…… I was always embarrassed by the words sacred, glorious, and sacrifice and the expression in vain. We had heard them, sometimes standing in the rain almost out of earshot, so that only the shouted words came through, and had read them, on proclamations, now for a long time, and I had seen nothing sacred, and the things that were glorious had no glory and the sacrifices were like the stockyards at Chicago if nothing was done with the meat except to bury it. There were many words that you could not

stand to hear and finally only the names of places had dignity.
..... Abstract words such as glory, honor, courage, or hallow
were obscene beside the concrete names of villages, the numbers
of roads, the names of rivers, the numbers of regiments and the
dates.²³⁾

あのいい気な憲兵達が口にしているのは、まさしくこれらの神聖
なとか、母国の土とか不潔な抽象語ばかりである。そして彼等が演じてい
るのは、自ら死の危険を全くなくして、死を他人にふり当てる。いわば抽
象的な正義の代表者の役割に他ならない。自らを汚すことをしない正しさ
をもって、傲慢に他人を裁いているわけである。これを作者自身が、自ら
を危険な立場に位置づけることなく、牛をさし殺す、ある種の闘牛士のう
ちなるものにさえも、敏感に嗅ぎつけずにはおかない大嫌いな態度であ
る。これを見ていた主人公は、一瞬のすきを盗んで水中に飛び込んで逃げ
ていくのである。彼の脱走は見られる如く、極めて独特な仕方で動機づけ
られているのである。しかし話はそれで終末とは決してなっていない。彼
は憲兵の死の銃口からは逃れ得たが脱走の果てに、彼を何に導くのであろ
うか。なるほど彼は更に愛人をたづさえ、風の強い夜、湖水をこぎ渡って
スイスに逃れ、スイスの山中で、すべてのわずらわしきから解放された、
本当に牧歌的な愛の日々を享受する事を得た。しかし又彼等の愛の日々
に、すでに非現実的な嗅いが漂っているばかりではなく、妊娠した愛人は
難産のためスイスの病院で生命を閉じてしまうのである。陣痛で苦しんで
いる彼女を見つめながら、「これがわなの行きつく先だ」とか「結局彼女は
奴らにつかまってしまったんだ、うまく逃れ終えたためしがない」と呟
く。生まれてすぐ死んだ赤ん坊についても、戦場での友人達を思い合せな
がら、奴らはお前を放りこんで、ルールを教え、ベースを離れることを見
つけたが、最後は殺してしまったのだ。が結局は奴らがお前を殺したので
あって、それだけは確かなことである。そこで待っていて見てもきっと殺
されるに違いないと語るのである。

ここでもう一度 'A Farewell to Arms' という題名を思い出して見よう。この小説のどこに誇らかな「武器よさらば」が響いているのであろうか。殺戮の武器は形を変えて、産褥の床にまで忍び寄っている。とすれば、この題名は二重のアイロニカルな意味を含むものと考えられる。この主人公にとって、「戦争と死」に対してさよならを告げる事は、一つの幻想にしかすぎなかった。どんなにもがいて見ても、戦争と死の影から逃れ去る事は遂に不可能であった。我々は等しく同じわなにかかっているのであり、もしそうでないと信じこんでいる人は、例の憲兵のような傲慢な阿呆であり、あるいは、一旦逃げ得た如くに見えても、この主人公のように、後で必ずわなの中につれもどされるのである。丁度 'In Our Time' が平和の非存在を証する作品であったように 'A Farewell to Arms' の非現実性、不可能性を証するためにこそ、この小説が書かれたと言っても過言ではない。死への偏執的な関心は、それ自体では価値や意味はない。'In Our Time' の基本的な条件として、把握された死の、いわば象徴性の発見と言えども、それだけでは静的な認識の域を脱し得ない。しかし 'A Farewell to Arms' に於ける抽象的な言葉の拒絶は、同時に物や土地の名前にディグニティーを感じとる態度に裏づけられていた。一切の価値を嘲笑し去るキニズムはそこにはない。更に主人公の脱走を捉がしたものは、憲兵的な局外者の冷然たる超越性への反発に他ならない。受身性という規定に固執しようとするならば、それは殆んど選択された受身性に近いものになる。

ヘミングウェイの人間感は、確かに死を中軸として動き、死を現代人にとって人間の条件として、いやもっと正確に表現するならば、その集中的、象徴的な表現として捉えることに固執し続けていると言えよう。死の相の下に捉えられた生……だがそこには安易な美化や超越をつけようとする強い意志が働いている。現代に於ける人間の条件を最も苛烈な形で作中人物に課し、その下で彼等の生き方を試そうという作家の意志が働いている事は言うまでもない。とは言え、作中人物について語るならば、死と戦

争状態によって最も良く象徴される現代的な人間の状況のうちに、彼等は投げ出され、逃れ難くまきこまれている。ヘミングウェイの主人公たちによって、状況はいわばアプリアリに与えられたものとして存在する。この様な状況を自分は射たれない立場で、上から見下ろしているのは、いかにも抽象的な傲慢と言うべきであろう。他方に於いては、状況自体を変革していく作業には、彼らの一般に関心を持たないものである。そこで、その様な状況をどの様にして対処していくのか、あるいはどの様にして耐えていくのか、又その中で自分はどの様に振舞うのかが彼等にとって中心的な問題になるのは自然の成行きに他ならない。

ヘミングウェイの世界に於いて重要なのは、しばしばそう考えられる様に、無目的な行動や、行動による陶醉では決してなく、意外なほどに、倫理的色彩が濃厚であると言うことであろう。彼の扱う人物は、しばしば価値や倫理に対して、激しい拒絶と否認の態度を示すが、それは因習的・習慣的な価値や倫理を空疎で、オブセスなるものとなす判断に基づいている。拒絶による清掃を望むからに他ならず、残された清潔な場所に、自らの手でディグニティを確保しようという衝動なのである。死の相の下には、ヘミングウェイに於いていわば、アプリアリのカテゴリーたることを越えて、生き生きした倫理形式の場と化するのである。有名なヘミングウェイスタイルの即物的な簡潔さというのも、単に美しい美学による文学的な産物とだけは言い難いものがある。言葉にまとりついた既成の抽象や価値の不潔さを払い捨てることが目指され、汚されない具体的な言葉のみによって、手ごたえのある確実な世界を築き上げることが欲求されている。それを支え、又それを裏づけしているものは、いわば白紙の状態からやり直して行こうと言う強靱な倫理的意識である。例えば、既に 'In Our Time' の第12章のエピグラフには突進して来る闘牛の前で…… firmly like an oak when the wind hits it,²⁴⁾…… 即ち、動ぜず、一瞬牛と一体になって相手を刺し終る闘牛士の見事な姿勢が描かれている。彼はまっす

ぐ立ち、両足はきちんとくっつけている。ここで用いられている ‘firmly’ や ‘straight’ や ‘tight’ は、そのまま作者の倫理的意識につながって出た言葉であると言えるであろう。この簡潔な素描の力強さは、美学的な選択よりは、倫理的判断に発していることは明らかである。この規範的な人物の形象は、そのままに、次作の ‘The Sun Also Rises’ に受け継がれて、闘牛士ロメロを誕生させ、あの荒地ふうな不妊な風土に、倫理的な支柱を提供する役割をになうのである。

ここで現在の主題に最も身近かな実例を一つあげて見ると、‘The Short Happy Life of Francis Macomber’ という短篇である。これは死の相の下に於ける倫理的変身の物語である。アメリカの金持ちの夫婦が登場し、妻君は美ぼうの持主である。自信も強い。夫婦仲は既に危うくなって来ているが、唯もっと良い相手を見つける為には、少々年をとり過ぎている理由だけで我慢をしている。夫の方でも離婚を考えるには妻君があまりにも美人すぎる為にちゅうちょせざるを得ない状態下にある。この様な夫婦関係の緊張を背景に、この物語が展開されていくのである。この2人がアフリカに猛獣狩りに出かけ、最初のライオン狩りの折に、急所を打ち損じて、やぶの中にとり逃がしてしまう。

マコーマーは狩りの為の白人のガイドと一緒にやぶの中に入りこんでいくと、深傷を負ったライオンが突然飛び出て来る。アッと思った瞬間、彼は既に逃げ出している。結局、ライオンはガイドの手で殺されるのであるが、彼は急に恐怖を感じ、気分が悪くなってしまう。そしてガイドに、危険なのでこのまま捨てて行くか、又は周りから火をかけて追い出す事をうながす。しかし、一方ガイドは、ライオンだって射たれて苦しんでいる状態なので放っておくのは良い事ではない。深傷のライオンは気が立っているので勢子に無用の死人が出るかも知れないんだと反対意見を述べる。

彼（白人）の主旨は、例え猛獣狩りと言えども、一方的なゲームは不正であって、動物の側にも、²⁵⁾ “we’ve given him time enough?” というの

が当然である。即ちこちらがやられる危険が少しもなく、一方的に相手を殺し去るのは不正なやり方であると言う。この狩人の掟は、そのまま憲兵の高見に立った超然たる正義に対する反撓につながっているものである。この掟を知らず、又守り損ずるマコーマーはヘミングウェイ世界のテストに失敗した臆病者に転落してしまうのである。夫の逃げ出す様子を見た妻君は、その晩、早速にしてガイドの男と関係を持ち、事態は、唯一つの反則も罰なしでは見逃せない厳格なゲームのように進行していく。翌日は野牛狩りに出かけるが、ここで又、ライオンの場合と同様な状況が生じて来る。しかし今度は夢中になって野牛を追っているうちに、彼のうちでは、恐怖がいつの間にか姿を消してしまっている。マコーマーは He expected the feeling he had had about the lion to come back but it did not.²⁶⁾ と言う事である。傷を受けて反撃して来る野牛が、ほんの鼻先まで追って来るのを待ち構えて射ち殺してしまう。がその時、車の中から様子を見ていた妻君の放った弾丸がマコーマーに当って、彼は死んでしまう。妻君の放った弾丸は、夫に迫った牛を射とうとして、手許が狂ったのであるとも考えられるが、夫の方が、自分の恐怖に打ち勝ち始めたあたりから、妻君が急に、目に見えて不気嫌になる様が描かれており、やぶに逃げ込んだ野牛の知らせを聞いた時、妻君は予期に満ちて (full of anticipation) 眼を輝やかすのである。卑法者は見事に変身し、彼の変身に嫉妬した妻君の手で射ち殺されたのである。ここで 'The Short Happy Life of Francis Macomber' という題名を思い出して見ると、マコーマーは妻君を寝とられ、更に彼女に射ち殺されて生涯を終えた。だがハッピーという言葉の中には、いささかの皮肉もかけさしてない。死の直前に You know something did happen to me²⁷⁾ と自らの変身を告げるマコーマーにガイドは "By my troth, I care not ; a man can die but once ; we owe God a death, and let it go which way it will he that dies this year is quite for the next."²⁸⁾ という文句を引用しつつ、自

分がそれによって生きて来たものを表に出した事に当惑しながらも、彼らしい祝福を与えられている。マコーマーの‘Short Life’とは字義通りのあらわすぎる程あらわな題名である。必死になって飛びかかって来る野牛を前にして、自分の全身を、完全に危険にさらしながらも、一歩なりともたじろかない。少しも見苦しい態度を示さないこの瞬間、マコーマーは外なる状況と内なる恐怖との両方に見事に打勝ったのであり、おそらくは、彼の生涯で最も幸福な一瞬を生きたのである。その瞬間に、妻君の放した弾丸が飛んで来て、いわば極めて幸福な死を遂げた人間とも言えるのである。即ち一人の卑法者に訪れた短かい幸福についての物語であり、幸福とは何かについての明確な倫理的態度が描写されている。‘In Our Time’に於ける人間の条件の集約的な象徴の死の影の下に生きる人間にとって、何が幸せであり、幸福は何処に存するかをヘミングウェイはこの章で端的に語ったものであると言ってもよいであろう。

その幸福の探求は、倫理的関心によって貫かれており、死のカゲこそ、ここで倫理的意識の強烈な集注の効果をもたらしているものである。現代に於ける個人的な倫理の一つの極限的な形と言う事も出来、ある与えられた状況での決意や行為、更にはその切迫した個人の位置の把握に於いて、実存主義者と呼ぶ事も許されるのではなかろうか。

- 註 1) A Farewell to Arms, Scribner, SL 61, P. 321
『ヘミングウェイ全集』 三笠書房1974年、第四巻 251頁。
- 2) ibid., P. 326, 同書訳本, 255頁。
- 3) ibid., P. 331. 同書, 260頁。
- 4) To Have and Have Not, Scribners, SL 132, P. 172. 「ヘミングウェイ全集」 三笠書房1974年、第五巻 113頁。
- 5) ibid., P. 225. 同書, 144頁。
- 6) Across the River and into the Trees, Scribners, SL 202, P. 306
「ヘミングウェイ全集」 三笠書房1973年、第七巻 280頁。
- 7) ibid., P. 307. 同書, 281頁。
- 8) Ernest Hemingway by Philip Young, P. 4.
- 9) The First 49 Stories, Jonathan Cape, P. 87.『ヘミングウェイ全短

篇集』 三笠書房 15頁。

- 10) *ibid.*, P. 87. 同書, 15頁。
- 11) *ibid.*, P. 89. 同書, 17頁。
- 12) *ibid.*, P. 90. 同書, 17頁。
- 13) *ibid.*, P. 90. 同書, 17頁。
- 14) *ibid.*, P. 170. 同書, 100頁。
- 15) *ibid.*, P. 179. 同書, 109頁。
- 16) *ibid.*, P. 171. 同書, 101頁。
- 17) *ibid.*, P. 166. 同書, 96頁。
- 18) *ibid.*, P. 167. 同書, 97頁。
- 19) *ibid.*, P. 120. 同書, 48頁。
- 20) A Farewell to Arms, scribners, SL61, P. 223. 前掲第4巻, 177頁。
- 21) *ibid.*, P. 223. 同書, 177頁。
- 22) *ibid.*, P. 223. 同書, 178頁。
- 23) *ibid.*, P. 184~185. 同書, 147頁。
- 24) *ibid.*, The First 49 Stories, Jonathan Cape, P. 146. 前掲全短篇集, 75頁。
- 25) *ibid.*, P. 37. 同書, 376頁。
- 26) *ibid.*, P. 34. 同書, 373頁。
- 27) *ibid.*, P. 36. 同書, 374頁。
- 28) *ibid.*, P. 36. 同書, 375頁。

参考文献

1. 'A Reader's Guide to Ernest Hemingway' by Arthur Waldhorn, 1972. Farrar, Straus and Giroux.
2. 'Ernest Hemingway : An Introduction and Interpretation' by Sheridan Baker, 1967. Holt, Rinehart and Winston, Inc.
3. 'Hemingway : The Writer as Artist, by Carlos Baker, 1970. Princeton.
4. 'My Friend Ernest Hemingway : An Affectionate Reminiscence' by William Seward .1969. A. S. Barnes and Co.
5. 辻元一郎著 アメリカ短篇小説研究 : 興文社
6. カロスベーカー著 大橋健三郎・寺門奏監訳 アーネスト・ヘミングウェイ全二冊 新潮社
7. 高橋正雄著 「失われた世代」の作家たち, 『20世紀アメリカ小説Ⅱ』富山房